優 優 優

「下町ロケットを読んで」

将来どんな仕事に就くか。うちの両親は私達を養うために毎日働いています。でも、頑張って働いていますが、仕事が楽しいかどうかわかりません。

中学三年の私は、将来の仕事について少しずつ興味をもつようになりました。まだやりたい仕事が具体的に決まったわけではないけど、どんな仕事が自分に合っているか、どんな仕事なら続けられるか、という、たくさんの選択と思います。そんな頃に、この「下町ロケット」を読んで、ますます、仕事、というものについて考えるようになりました。

佃製作所の社長を務めている主人公佃航平は、仲間と共にロケットの水素エンジンを製造開発し、ロケットの打ち上げ成功を目指して、全力を掛けます。でもそれは、決して簡単なことではありませんでした。会社が赤字の危険に陥ったり、他の企業と争いが起こったり、打ち上げ成功への道のりは険しく困難なもので、ハラハラドキドキの連続です。

その中でも一番心に残ったのは、佃が部下とお金もうけのことで対立する所です。エンジンを作って売るより、他の企業に技術を売る方がもうかるのではないかと部下は考えますが、佃はそれを否定し、二者の関係には大き分亀裂が入ってしまいます。

今の私だったら、部下の人の意見に賛成です。生活の基本はお金だから、どんなに夢があってもそれだけでは食べていけないのが今の現実だと思うからです。でも、佃は給料よりエンジンを作りたいという子供からの夢を選択したのです。佃は彼の考え方が理解できず、こんな考えでは甘いんじゃないかと思っていました。けれど、読んでいくうちに、仕事というのは収入だけが全てじゃないと思えてきました。彼は、この本の中でこう語っています。「仕事っていうのは、二階建ての家みたいなもんだと思う。一階部分は、飯を食うためだ。必要な金を稼ぎ、生活していくために働く。だけど、それだけじゃ

本屋だ。だから、仕事には夢がなさやならないと思う。それが二階部分だ」と。

仕事はいったい何のためにするのだろうか、私は彼の言葉の意味を考えました。彼は、仕事は収入を得るためだけではなく、夢を叶えるためであると言い切ります。「どうしてこんなにきっぱりと言い切れるのか。私の仕事に対する考え方は揺れました。夢だけ追いかけても生活はしていけないし、生活だけしていても夢がなければつまらない。つまらないことは続けられない。続けられなければ、結局仕事も笑ってしまう。人間はしなければならないことは続けられないものです。夢がありからこそ仕事をする、このことは私の心に強く残りました。

最後のシーンは、ロケットの打ち上げが成功し、佃が家族や仲間と喜び合います。彼の夢が叶った瞬間であり、また、次のステップへの第一歩でもあります。みんなの思いをのせてロケットは空高く舞い上がり、佃製作所

の人々を感動させました。

佃は、やりたいことを諦めず、それに向かって純粋に努力しました。だから、最終的にそれが結果となって表れたのだと思います。

夢に向かって走り続けるこのような人の姿は、かっこいいです。誰の目にも輝いて映ります。「仕事で人の喜ぶ顔がみたい」とか、「この会社がこうしてやろう」という夢を抱くことで、仕事にやりがいが出てきます。佃は、ほかの仲間にもこのことを気付かせました。佃製作所の人達は、心の底から仕事への情熱をもって、心を一つにして取り組むことで、大きな成功と喜びをものにしたのです。

彼は仕事に対して、「挑戦の終わりは高たな挑戦のはじまりだ」、「肝心なことは、後悔しないこと。そのためには、全力をつくすしかない」と言っています。挑戦ができるから人生はおもしろいし、可能性に満ちている。不可能と思えることが可能になるから、人は努力することに意味を見い出すのです。希望

や未来を持たない、毎日同じことを繰り返す仕事だけでは、味のない御飯を食べ続けるのと同じです。後悔しないように、毎日の中に喜びと苦しみのある仕事の方がずっと楽しいです。私は個のように夢を抱いて、一つのことを成し遂げられる社会人になりたいと思います。

私が精一杯できること、今しなければいけないことは勉強です。とにかく、毎日勉強に励んでいます。まだ具体的な将来が決まっていわけでもないし、今のこの勉強が何のためになるかどうかはよくわからないけれど、夢や目標を見つけ出すため、そして、自分の可能性を広げるために、頑張らなければならないと思っています。仕事をして、お金を得る。働く楽しさやヤッがいを味わう。それはつまりより良い人生を生きていくということです。何かを達成した喜びを味わうその一瞬のために、彼の教えてくれた言葉をにぎりしめて、頑張ろうと思います。

優 優 優

地球の声に耳をすませて

突然ガタガタッと大きな揺れが来て、地の底から太鼓をたたくように響く大音響と、繰り返される振動がものすごく長く続いたように思えた能登半島地震。その時私は小学校二年生で、何が起こったのかよくわからず、ただおびえているばかりでした。両親もおじいちゃんおばあちゃんもパニックで、家や学校もその余震でビクビクして過ごした一ヶ月余り。あの揺れの感覚は、今では遠くなっていますが、時々、思い出したように〝地震だ〟と身体が反応する位、強烈な気憶です。

なんとその四年後、私が小学校六年生の卒業式を迎えようとしていた矢先、この気憶を呼び覚ます揺れが突然起こりました。「どこだろう、また？」と思っていると、職員室が騒然として、テレビからは、東北での大地震の衝激的な映像が流れ始めました。画面全体が小刻みにふるえ、津波で次々とのみこまれてゆく車や建物。その映像の前で、私は言葉を失ってしまいました。

それを思い出させたこの本。地震について学ぶことが沢山あったことと、地震に対する認識が変わったり、地球ってすごいなと素直に感じることができた本でした。

著者は地震学者です。彼女は私達に何度も何度も伝えます。それは「地球はとてもおしゃべりだ。」「地球に耳をすませてみて。」と。これは、地球に隠されている〝セリフ〟を感じたり、地球に耳をすますことで、地球はどのようにして生きていたのかを、まず知って欲しい、考えて欲しいということです。そして、地球に起きてしまうさまざまな現像を嫌がらず、正面から捉え、理解することが大切だと言っています。地球上で起こる予側不可能な大きな災害や、それに〝よって〟受ける災害は起きてしまってからではどうすることもできないものですが、それはある意味、生きているる地球が、私達人類に訴える叫びでもあるのです。

それを受けとめ、その上で著者は、「地球

のメッセンジャーとなってほしい。大切な命を守るために。と私達に呼びかけます。私達は、周りの人たちの命を守るための、具体的な行動ができるようになること、また、常に何ができるのか真剣に考えなければなりません。

彼女は東北の震災後、「余震によって失われた命」の記事を呼んで悩みます。「もっと地震について知ってもらえていたら、大きな地震のあとの余震はとても危険だと知らせていたら」何より命を優先することと、逃げる所を確認しておくこと、どんな場所で何が起こっても心を備えておくことを強く言っています。自分の命は自分で守ることを基本に毎日のあらゆる場面でのイメージや訓練が人々を救うのです。そして、それを他の人と分かち合うことが周囲の人を助けることになるのだと。私達一人一人が、地球からメッセージを受け取り、対応し、それを発信するメッセンジャーにならなければ突然

の災害の後に起こる悲劇を一つでもなくすことはできません。

地震のしくみで対応だけでなく、この本で今まで知らなかった地球の内部の美しさも知ることができました。マグマの燃えたぎる場所でつくられていく様々な美しい宝石、そしてきれいな流れる鉄、私たちの足元の地面の奥深くにそれがあると想像すると、感動と驚きの気持ちで一杯になります。これが一番地球が動いている、生きていると実感できる場面でした。地球は私達人間と同じだと感じることができました。人間も時に感情を爆発させ、暴れ、大声で叫ぶように地球もエネルギーを爆発させながら活動しているのです。その現像の一つが地震です。それは、いつ起こるかわからない突然の現像であるため、私達は危機感をもって過ごしていかなければなりません。ところが文明の進歩と共に人間は、自然災害への危機感を希薄にしてしまいました。

人間は自分の都合のいいように自然を壊し本来建ててはいけない場所に家を持ち、昔の人が避けた所に、「便利」という意識を優先して進出してきました。その結果人々は昔はあった自然からの呼びかけに耳を傾けるという姿勢や、自然への畏敬の念を失い、永遠に平和な毎日が過ぎていくものと思って生活しているような気がします。けれど、地球がもたらすものであることを常に忘れず、あらゆる災害に対するアンテナを張り、情報に気を配り生命を守る方法を身につけないといけません。

筆者は、小学校で地震に対する授業をして回っています。いろいろな場面や状況に応じて、自分で考えて行動できる人になって欲しいと言います。命を優先させることができたらそれが「正しい行動」、花マルだと。活発な活動を続ける私達の星、地球。そしてここで私達が生きているという奇跡。私達はもう、地球を知り、災害から生き残る能力を高め合い、支え合って生きていきたいと思います。